救える命があればどこへでも

―国際医療ボランティア　AMDAのとりくみ

第1回

教育の原点　～不条理への挑戦～

菅波　茂【特定非営利活動法人　AMDA代表】

平均寿命女性85歳、男性78歳。世界一である。単純に喜ぶべきか。生きることとは「死ぬまで我が身を養いつづけること」である。仏教の説く「生・老・病・死」の苛酷さを経験せざるを得ない。人智を超えた不条理の世界である。我が子の世代は少なくとも私より20～30年、孫の世代は40～50年の不確実な未来を生きていかなければならない運命にある。死ぬまで生きなければならない人の苛酷な現実の前には思わず畏怖の念にかられる。ちなみに、畏怖とは恐れおののくことである。

不条理の世界に生きていかなければならない私たちの後に続く世代に伝えておかなければならないことがある。生きていくための問題解決能力である。それが教育の原点である。教育の原点は不条理の世界に対する畏怖の念でもある。

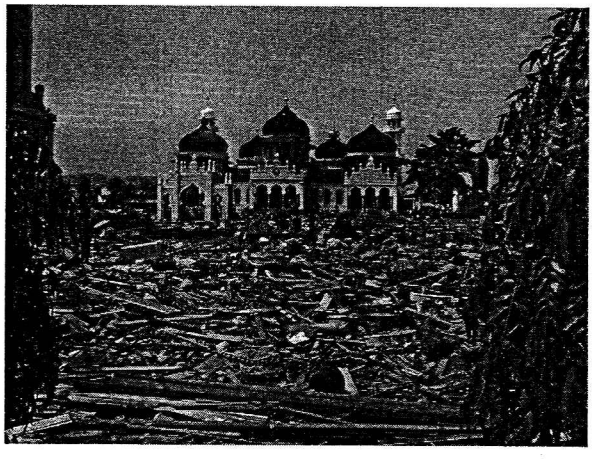
昔の塾とは師が弟子を選ぶ制度であった。生徒が知識を基準に問題解決能力への水先案内人を選ぶ制度がいいのか、問題解決能力のある水先案内人が問題解決能力の教育を受ける素質のある弟子を選ぶ制度がいいのか。いずれにせよ、不条理の世界に対する畏怖の念を原点としなければならない。

生き方が問われる

私はAMDAの活動を通じて不条理の世界が確実に存在することを経験してきた。不条理の世界で救いを求める人たちに手を差し伸べてきた。不条理の世界に光をあてると得体の知れないものが見えてくることがある。自分なりに定義づけの訓練をすることが肝要である。定義付けの3要素がある。第1は小学生の6年生にも理解できる容易な日本語を使用する。第2はできるだけワンセンテンスで説明する。第3は応用が効く事である。上級コースとしての問題解決能力養成に不可欠なことは逃げないことである。各人各様の生き方そのものが問われることである。

AMDAの活動は主として国民の税金と善意の募金によってなされてきた。AMDAの国際ネットワークのみならず多くの経験も公共財と

■スマトラ島沖大地震・津波緊急救援活動■



インドネシア・バンダ・アチェの津波被害のあと

インドネシア・バンダ・アチェにて麻疹ワクチンを接種

思っている。次世代を育てる教育の世界に経験と見識を還元することも公共財としての責務であると信じている。

1996年。AMDA国際大学構想の設立を提唱した。詳細は月刊『AMDA Journal』を参照していただければ幸いである。2001年。AMDA国際大学構想は公設国際貢献大学校として具体化した。AMDA副理事長である的野秀利氏の尽力によることを明記しておきたい。私は校長として開校のあいさつで下記の理念を述べた。

20世紀は「大きな思想」の時代だった。大きなとは死をも賭するという意味である。21世紀は「小さな心」の時代である。小さなとは個人あるいは家族という意味である。したがって、社会のパラダイムも「権威ある代理制」から「個人の直接参加制」へと移行してきている。もっと具体的に言えば、現在の世界秩序は「民族の自決」という大きな思想を原則とした「近代国民国家」を単位として形成されている。一方、個人の参加を原則としたNGO/NPOが世界的な影響力を形成してきている。理由はIT革命である。代理制に不可欠な要素である「権威」が情報の公開と流れの変化により崩壊していることである。権威の崩壊は個人の参加を容易にした。NGO/NPOが多様性に富む個人の直接参加を受け入れる世の中の仕組みを推進している。同時に「小さな心」を代表していくと思われる。国家の存在に比べるとNGO/NPOの存在の正統性はまだまだ未成熟な段階だが、時代の要請が国および市民の両サイドからその正統性を育成していくと思われる。

相手にどのようなメッセージを伝えるか

多民族、多宗教、多文化の国際社会において「多様性の共存は」20世紀から21世紀への課題である。多様性の共存の基本は信頼である。相互理解、相互支援そして相互信頼が大前提となる。相互信頼への醸成に向けて日本は国際社会でどのような役割が果たせるのか。それは日本の特徴と特性を認識した国際

貢献のあり方を考えて実施することで可能になる。「大きな思想」が啓典の民（旧約聖書、新約聖書、コーラン）によって提示されてきた歴史は注目されるべきである。同時に非啓典の民（仏教、ヒンズー教、儒教など）の考え方を理解することは日本の21世紀の国際貢献にとっては不可欠な要素である。このことは内なる国際化の進行している日本国内にもあてはまることである。

国際貢献で最も重要なことは相手に対してどのようなメッセージを伝えたいのかという事である。日本の特徴と特性をふまえて世界が理解してくれるミッションステートメントが求められる。それは「平和と相互扶助」だと確信している。平和とは「家族の今日の生活と明日の希望が実現できる状況」である。この平和を阻害する要因として戦争、災害そして貧困がある。それらを共に解決する精神として相互扶助がある。人間は誰しも、他人の役に立ちたい気持ちの反面として、たとえ援助を受ける側になってもプライドは持っている。「困った時はお互いさま。今はあなたが困っているのでお手伝いします。将来、私が困った時には助けてください」。これが相互扶助である。相互扶助による活動を通して「尊敬と信頼」の人間関係を構築することにより、「多様性の共存」を推進することが可能となる。すなわち、「小さな心」による「多様性の共存」への試みである。もちろん、「大きな思想」による戦争、災害そして貧困などの諸問題に対する解決も世界規模で続けられている。このことの理解も大切なことである。そして「大きな思想」による解決方法と「小さな心」による解決方法の比較だけでなく、両者の組合せによる新機軸も期待されている。

活動の底に流れるもの

高校2年生の夏に光文社発刊の『太平洋戦争写真集』上下2巻の下巻に載っていた1枚の写真にショックを受けた。南方戦線で浅瀬に顔を半分ぐらい埋めて戦死している若い日本兵だった。なぜだ。セミの鳴き声が今でも耳を離れない。AMDAの活動の底流には常にこの気持ちがある。物の見方や考え方が異なる人たちがどうすれば共存できるのか。違いは財産かお荷物か。1984年にAMDAを設立して以来、私の仮説でもある「多様性の共存」というAMDAの理念の実現に邁進してきた。

2004年12月26日に発生し、22万人以上の死者・行方不明を出したスマトラ島沖大地震・津波による被災者救援活動は「多様性の共存」を実現した活動となった。まさにAMDA設立20年目だった。本部と9ヵ国の支部が協力して100名以上のスタッフをイ

ンドネシアのバンダアチェ、インドのチェンナイそしてスリランカのカルムナイや北東部に派遣して救援活動を実施できた。私からの電話一本で各支部長は医療チームの派遣を決定してくれた。インドネシアの救援活動にはインドネシア、カンボジア、カナダ、ネパール、台湾の支部と本部からの合同チーム。スリランカの救援活動にはスリランカ、カナダ、ニュージランド、カンボジア支部と本部からの合同チーム。インドの救援活動にはインド、ネパール、バングラデシュ支部と本部からの合同チームが活動した。イニシアチブを発揮したのは被災地の支部だった。彼らの社会的影響力と人脈なしにはこれほど迅速にして効果的な救援活動は期待できなかった。私たちの活動のキーワードは「相互扶助」だった。

悲しみを共有する宗教

2005年3月12日。岡山に9ヵ国の支部長が参加して「国際救援シンポジウム～岡山から世界へ～」が開催された。津波で亡くなった被災者のために各支部長はそれぞれの宗教を背景にしたお祈りを捧げた。人知を超えた不条理に対して悲しみを共有するために宗教は不可欠であることを再認識した。2005年12月3日にはインドのチェンナイで、12月26日にはインドネシアのバンダアチェとスリランカのカルムナイで地元の聖職者の協力を得て慰霊祭を行った。AMDAは大規模災害に対してAMDA多国籍医師団が活動した被災地で慰霊祭を行い、AMDAピースクリニックを建立して救援活動に参加したスタッフの名前と募金をしてくれた人たちの名前を明記することにした。AMDAと募金者の平和へのメッセージを永遠に伝え続けるためである。このアイデアは沖縄の摩文仁の丘にある平和の礎にある。

摩文仁の丘にある平和の礎は戦争和解プログラムとして画期的な新機軸である。沖縄戦で亡くなった日米両軍のみならず巻き込まれた沖縄の人たちも含めたすべての名前が刻まれている。古今東西に戦争記念碑が残っているが、大方は勝った方の戦勝記念碑か慰霊碑である。敗れた方の慰霊碑は朽ちているか目立たずにひっそりと世をしのんでいるのが現実である。すべての名前が刻まれている平和の礎はすべての死者の人権を表現している。AMDAの人権の定義は「存在を認めること」である。名前は「あなたのことを忘れていません」である。平和の礎には沖縄の心根の優しさが宿っている。

教育の原点は不条理に対する問題解決能力の要請である。なぜそのように考えるのか。これから1年、読者の皆さんにお伝えしていきたい。